

「ラクダが針の穴を通るより」

ルカによる福音書 18章

18 ある議員がイエスに、「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた。

19 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。

20 『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。

21 すると議員は、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。

22 これを聞いて、イエスは言われた。「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

23 しかし、その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。

24 イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。

25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

26 これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言うと、

27 イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。

28 するとペトロが、「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と言った。

29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、

30 この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

31 イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。

32 人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。 33 彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

34 十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。

「金持ちが神の国に入るよりもらくだが針の穴を通る方がまだ易しい」

議員とイエス様の対話からのお話です

この議員はまじめな人だったと思います。

そして、神様からの祝福を求めている人でもありました。

だからこそ、彼はこう尋ねます

「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」

イエス様への尊敬や永遠の命への期待、そして自分自身への自信が彼の中にはありました。。私なら何かを成し遂げることできっと救いを勝ち取ることができるという自信。ここに誤解があったようです。

1) なぜ、わたしを善いというのか

単なる褒め言葉だったら、受け取っておいても良いのではないかと感じますが

イエス様はこの部分につよく反応しています。

この人はイエス様に対して「あなたは神のような善い人なのでしょう。だったら、私が自力でなんとか永遠の命を得ることができるよう手配してくださいよ」

というようなニュアンスで迫ったのでしょう。

そして、イエス様は十戒の中にある戒めをいくつか提示して、あなたはこれらを知っているはずだと答えます。

「善い先生、神様に近い存在に、折り入って近づき、なんとか自力で永遠のいのちを受け取れるように手配をお願いしよう。私は議員なのだから」そんな雰囲気です。

イエス様は

「善いお方は神様だけだ。そしてあなたには十戒がある」

つまり、その議員は、それを守り抜いたら永遠の命を得られると信じていたのです。

そして、その議員は自信満々でこういうのです。

「そういうことはみな、子供の頃から守ってきました」

私の生活態度を見てください、永遠のいのちにふさわしい生き方をしているでしょう。その確信のために、先生、なにか手配してください。私はそれにふさわしいのですから」というわけです。

するとイエス様は彼に

「あなたには欠けているものがまだひとつある。持っているものをすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」

と伝えます。自分のものを捨て、人に施し、イエス様にしがたってついていく。

これがイエス様によって提示されたヒントでした。

この議員は非常に悲しみます。大金持ちだったからです。

でも、ここでイエス様は、自分の持っているものを全部売り払うなら永遠の命が得られるとは教えていません。

「自分の宝を弱者に分けてあげること」と「イエス様に従うこと」を求めています。
金持ちの議員は、自分の依って立っている立場や富が永遠の命を得るためには無益であることを知って、愕然とします。そして彼が大いに悲しむのです。
でも、悲しみながら「主よ、何もできない私を憐れんでください」と祈ることができれば何か変わったかもしれません。
彼にとってお金や財産は、自分の「神」のようになっていたのでしょう。そして自分に対する自信もしっかり心に据えられていたのだと思います。

2)そして、イエス様の有名な言葉が語られます

「財産のある者が神の国にはいるのはなんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりはらくだが針の穴を通る方がまだ易しい」

「らくだが針の穴を通る」というのはあまりに唐突な言い方に感じます。
実は「らくだ」という言葉と「ロープ」という言葉の発音が同じで、本来ロープと書くべきところを「らくだ」と書いてしまったのではないかと言う説があり、実際、シリア語の聖書では「ロープ」になっています。

らくだであれ、ロープであれ、どちらにしても針の穴を通ることは不可能です。
自力を信頼している人にとって、救いを受け、恵みとしてわかることはそれほど難しいのだということです。

27 イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。

「恵みによる救い」は神様の出来事、神様の側からの一方的な祝福の提供なのです。
ここでペトロが割って入ります。おそらく自慢したかったのかもしれませんが。

28 するとペトロが、「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と言った。

29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、

30 この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

神様のために何かを捨てるというのはいわゆる美談になりますが、これも金持ちの議員の姿勢と共通しています。

イエス様はペトロの話を受けて「「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、30 この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

と語り、捨てたものに対する「報い」はあると教えています。

でも、「永遠の命」は報いではない、ということをイエス様は伝えたいのだと思います。
ですから、すぐにイエス様はご自分の受難について語ります。

3)十字架と復活の中にこそ

31 イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。

32 人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。 33 彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

苦難を受けた後、「人の子は三日目に復活する」と語り、この復活の主に対する信頼こそまさに重要なのだと示しているのです。でも、弟子たちはなんのことかさっぱりわかっていませんでした。

律法的には真面目に生きてきた議員。しかし、彼にとって金銭的な富は神そのものだったようです。そこには人に対する「無償の愛」はありませんでした。常に、自分で行ったことへの報いとしての「救い」を求めていたのです。神様からのご褒美としての救いを求めていたのです。その点においては、弟子たちも同じです。自分たちは全てを捨ててイエス様にしがっているのですから、その報いとしての何かはありますよね、と尋ねたことになります。

イエス様はその報いがあると教えているのですが、この流れの中でイエス様が伝えたかったのは「復活のイエスを主、救い主として信じること」

そのことを妨げるもののなかに「富」があり「律法的高慢」があり「捧げてきました」という自己礼賛があります。「自分がこれをやったから」救われたのだという自力で救いを勝ち取ったような意識。

イエス様は「人の子の苦難と復活」のなかに救いがあり、それはあなたがたのところに福音として届いているのだと教えているのです。

イエス様への信頼、イエス様の十字架と復活についての理解、そこに提示されている罪の赦しと永遠の命への希望、そして、それが私たちの能力や実力と関係なく恵みとして届いているということに注目しなければなりません。

それはラクダが針の穴を通るほど「不思議な出来事」です。恵みとは、救いとはそのくらい不思議な出来事なのです。

祝福は届けられています。

買えませんし、何かをやったことの褒美としてももらえません。

神様の側からの一方的な祝福の提供なのです。

でもプライドが邪魔をしてなかなか受け取ることが難しいのです。

聖霊はあなたの心をやわらかくし、ふーっと風のように入り込み、理解させその祝福に気づかせてくださるでしょう。

MACF 礼拝説教映像はこちらです

<https://youtu.be/J2c9WzzEvmE>